

# 近代英語協会第 35 回大会

—— シンポジウム・研究発表・特別連結講演 ——

開催日：2018 年 6 月 23 日（土）

会場：京都大学吉田キャンパス文学部第 3 講義室

京都府京都市左京区吉田本町

Tel.075-753-2736（家入研究室）

近代英語協会事務局分室

〒722-8506 広島県尾道市久山田町 1600-2

尾道市立大学芸術文化学部 平山研究室内

メールアドレス：hirayama@onomichi-u.ac.jp

協会ホームページ <http://www.modernenglish.jp/index.html>

(Tel.0848-22-8311（代表） 会費振込口座 00810-9-5821)

## 『英語話法に関する史的研究の課題と展望』

司会： 今 林 修 (広島大学教授)  
講師： 小倉 美知子 (東京女子大学教授)  
講師： 中尾 佳行 (福山大学教授)  
講師： 今 林 修 (広島大学教授)

### シンポジウム趣意書

広島大学教授 今 林 修

英語における話法の射程は広く、発話、思考、語りに関する研究をはじめ、文体論と物語論の発展によって、知覚の伝達形式や視点の微妙な動きにまで理論研究が及ぶようになってきた。18世紀初頭の小説の勃興により、話法は多様化し、その技術や芸術性も19世紀を通じて進歩し洗練されてきた。話法研究は、20世紀初頭に開花した意識の流れの小説を精緻に批評・分析するために発展してきたといっても過言ではなかろう。それ故、話法研究とその理論構築の対象といえ、後期近代英語から現代英語に偏りがあったことは否めない。しかし、21世紀を迎える直前からその研究法は遡及的に適用され始め、初期近代英語、中英語、古英語へとその触手を伸ばしていった。

今回のシンポジウムでは、主に古英語から後期近代英語の文学テキストに表出された話法における問題点を提示し、英語話法における史的研究の課題と展望を議論したいと考えている。

### 「古英語文献における直接・間接話法」

東京女子大学教授 小倉 美知子

古英語期(700-1150)においては、まず句読法が現代とは全く違っていたことに留意せねばならない。Double quotesは言うに及ばず、句読点、疑問符、感嘆符等は写本に表示されている訳ではない。従って直接話法かどうかは、文脈と代名詞の変換に頼ることになる。次に文体的特徴として、詩・散文・行間注釈の違いはあるが、詩はほとんどが散文的に記述されており、短い詩では、それ自体すべて直接話法ととることもできるものもあること、散文の中にも詩と「分析できる」部分があること、文の途中で急に直接話法が登場する場合もあること、また聖書においては、引用文がラテンを訳した際の「型」に沿って記述されるなどの特性がみられる。本論ではこれらの点を、実例により提示する。

## 「中英語韻文に見る話法の意味論—『トロイラスとクリセイデ』を中心に—」

福山大学教授 中尾 佳行

言語が生身の人間によって発せられる以上、主観が混じるのは不可避のことである。問題は、その主観を言い表すことが、時代・社会・文化によって、どこまで積極的に推し進められるか、あるいは抑制されるか、である。全知の視点を否定した 20 世紀のモダニズムの個の意識の追究は話法の精緻化をもたらし、その方法論は遡及的に適用され、今やと歴史的にいつそれが生み出され、定着していったのか、が問われてきた (Fludernik (1993, 1996), Fleischman (1990), Moore (2011))。中世はロマンスの文学ジャンルの導入で、普遍に対し個の心情や感覚が追究され、「真実」とは何かは、全知に閉じられない、視点の問題を引き起こす。このロマンスは主として韻文で書かれた口承詩であり、詩人は人物の言葉か語り手の編集かの区別を言語指標で示すものの、その境界線の緩さを逆手にとって、微妙な art に仕上げてもある。本発表ではチョーサーの話法を意味論的な観点から、『トロイラスとクリセイデ』を中心に検討する。

## 「近代英語期における話法の諸問題」

広島大学教授 今林 修

英語における話法の発達と変遷は、英文学史と並べてみると、英語史における初期近代英語期から後期近代英語期への過渡期、つまり 18 世紀が非常に重要で興味深い時期であるといえる。18 世紀初頭には小説という文学における新形式が勃興し、発話・思考・語りの提示と再現において、小説は新たな構造や形式を模索するようになる。本発表では、近代英語期において英文学史と並行して話法の発達と変遷を概観することによって、小説という文学における新ジャンルが話法に与えた影響を整理し、20 世紀初頭に産声をあげる意識の流れ技法を駆使した小説にみられる話法への発展を考えたい。

## 1. 「Emmaの自由間接談話における音調の解釈」

大分県立看護科学大学准教授 宮内信治

本論では、Austen (1816) の作品 *Emma* の朗読音源を用いて、作品中の自由間接談話 (Free Indirect Discourse: FID) における音調変動の含意を検討する。物語背景に基づく旧情報 (shared, given) は上昇調で、背景が共有されていない新情報 (new) は下降調で発話表現されるといふ談話音調理論 (Discourse Intonation Theory) を枠組みとして、作品終盤の主人公エマによる内省の場面でエマの視点からなされる FID の音調を観察した結果、そこに全知の語り手から読者への語りかけが Irony として同時に表現されている可能性を、作品解釈の視点の一つとして提案したい。

## 2. 「Jane Austen の英語における comment clause について」

成蹊大学教授 田辺春美

近代英語散文の金字塔と称され、その文体が高く評価されている Jane Austen の英語についての研究はまだ多いとは言えない。本発表では、*Pride and Prejudice* (PP) において、一人称代名詞+認識動詞現在形の形式で話者の認識的な立場を表す comment clause (CC) の用法について研究する。PP では、I hope、I think の頻度が高く、続いて I believe、I suppose、I know が高頻度で使用され、*Paston Letters* や初期近代英語書簡コーパス (CEECS) の女性と類似した傾向がみられることがわかった。また、CC の文中の位置を見ると、現代英語ほど文末は多くないものの、I hope、I believe、I suppose は文中で自由な位置に置かれることが多く、挿入句としての発達を確認できる。Austen 自身の書簡や同時代のコーパスとの比較により、Austen がどのように CC を用いて小説の登場人物の認識的態度や相手への配慮の表現を可能にしたのか示す。

## 1. 「John Winthrop (1588–1649) の do 迂言用法—ジャンル別の用法分析から—」

京都大学大学院生 福永 真理子

Nurmi (1999) によると、迂言的 do は、17 世紀前半期に生起頻度が肯定文で減少、否定文で上昇する。本発表では、1630-49 年の John Winthrop の資料をもとに、迂言的 do の生起頻度は、テキストタイプ（口述伝達記録・口述伝達スピーチ原稿・書簡・歴史・その他記述伝達文）によって異なることを示した上で、肯定の迂言的 do と各テキストのスタイル（formal vs. informal）との相関関係について考察した内容を報告する。迂言的 do の生起頻度が最も少ない私信については、1620-30 年との比較において、肯定文では減少、否定文では上昇していることを示し、私信における do 迂言用法の表現変化について共起動詞との頻度変化をもとに検討する。

## 2. 「エリザベス一世による『詩論』の英訳—訳文の言語的特徴と解題の試み—」

四国大学助教 平 歩

本発表では、エリザベス一世が英訳したホラティウスの『詩論』と、同時代に本詩を初めて英訳したトマス・ドラントによる訳文とを比較することで、女王による否定表現や助動詞 do などの使用傾向を示す。本作品は詩作のコツについて比喻を用いて説明しており、後世の西欧文学に多大な影響を及ぼした。詩や劇の創作に関する作品であるものの、晩年のエリザベス一世による訳文には、当時の彼女が置かれていた立場や女王としての振る舞い方を投影していると思われる部分がある。そこで、言語的特徴や作中への加筆、削除、そして誤訳と思われる箇所を指摘しながら、エリザベス一世による翻訳の解題を試みる。

### 3. 「大母音推移再考」

筑波大学名誉教授・聖徳大学名誉教授 藤原保明

大母音推移 (The Great Vowel Shift, GVS) については、Jespersen (1909) 以降、100年以上にわたって変化の仕組みや過程などの研究が行われ、詳細な説明が蓄積されてきた。しかし、Krug (2017) の指摘を待つまでもなく、GVS の動機ないしは原因に関する傾聴に値する記述はほとんどない。“push chain” か “drag chain” かという議論が今でも行われているのを見ると、GVS 研究は進展しているとは思えない。GVS の結果は現在の英語にどのような言語学的影響を及ぼしているのか、[ə] の出現以降の種々の音変化は GVS の出力とどのような関わりがあるのか、など、より広範な視点からの分析結果と GVS の出力を擦り合わせない限り、GVS の核心には迫れないと思われる。今回の発表によって GVS 研究の突破口を切り開きたい。

#### ■ 特別連結講演 第一部 16:30—17:30

---

司会 京都大学教授 家入葉子

“Sound and Style of *Confessions of an English Opium-Eater* by Thomas De Quincey”

京都大学名誉教授・関西外国語大学名誉教授 豊田昌倫

Thomas De Quincey’s *Confessions of an English Opium-Eater*, published in 1821, is regarded as one of the subtlest masterpieces of prose writing of English literature. In his ‘introduction’ in Everyman’s Library edition, John E. Jordan refers to De Quincey’s ‘painstaking mastery of assonance, alliteration, balance, swelling and falling rhythms and haunting and evocative diction’. In my paper I would like to make a phono-stylistic analysis of some of the most memorable passages in his first important work.

■ 特別連結講演 第二部 17:30—18:30

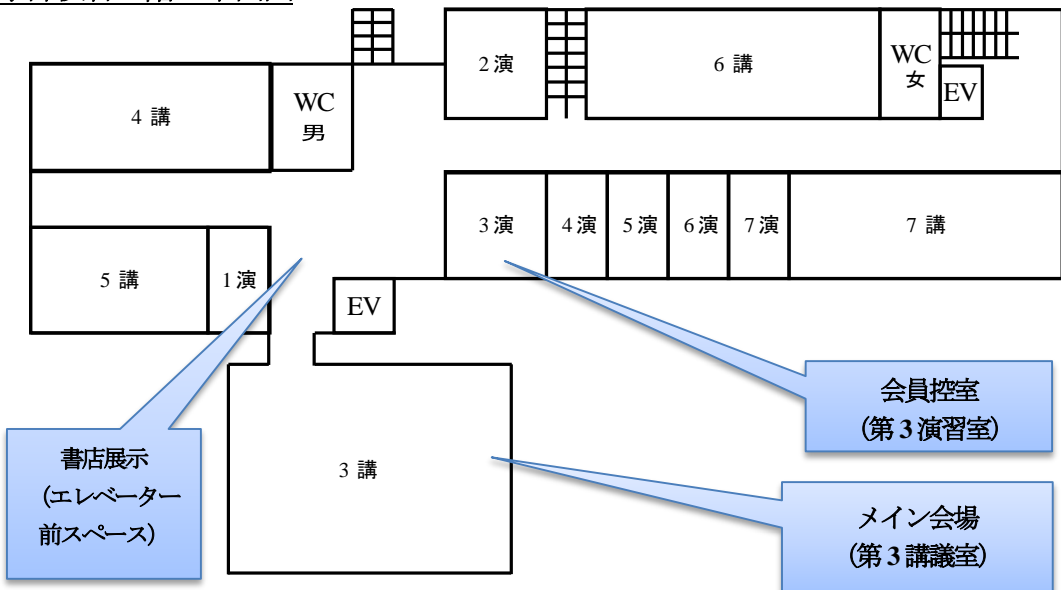
司会 愛知県立芸術大学非常勤講師 糸山 陽子

“Spehk thuh speech uh preh yuh: Shakespeare’s Original Pronunciation”

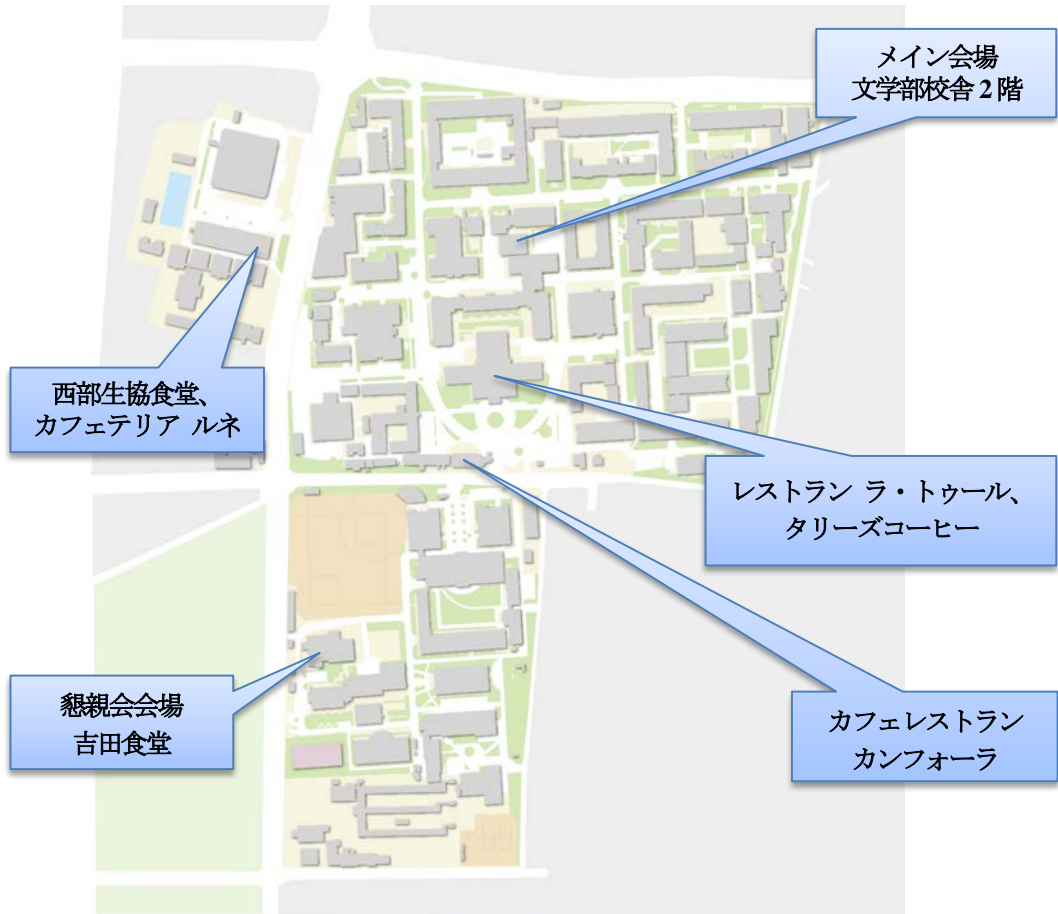
English actor, author, and producer Ben Crystal

What did Shakespeare’s accent—and that of his actors and audience—sound like? What can we learn from hearing and speaking his works in that accent? And with no recordings or transcriptions available to us, how do we know? The Shakespearean actor Ben Crystal (author of *Shakespeare’s Words* and *Shakespeare on Toast*) takes us on a journey to explore the fascinating 400-year-old sound of Shakespeare’s plays and sonnets—Original Pronunciation—and reveals a world hidden beneath our modern accent readings, discovering rhymes, rhythms, and a very subtle humour. And a not-so-subtle one too.

文学部校舎2階 平面図



京都大学吉田キャンパスマップ (食堂等は土曜日営業のものを表示)



京都大学 吉田キャンパスへのアクセス

